

**第3回(仮称)国際センター駅北地区複合施設基本設計  
業務委託に係る公募型プロポーザル審査委員会・結果発表・講評 議事録**

日時：令和6年9月8日(土) 9:50～18:15

場所：日立システムズホール仙台 会議室3、交流ホール、エッグホール

出席委員：青木淳委員、岩間友希委員、富永祥子委員、西沢立衛委員、高橋新悦委員  
(高橋委員を除き五十音順)

出席オブザーバー：本江正茂氏、本杉省三氏、小口恵司氏

議事次第：1. 開会

2. 本日の進行について
3. プレゼンテーション及びヒアリング(公開)
  - (1) 市長挨拶
  - (2) 審査委員長挨拶
  - (3) プレゼンテーション及びヒアリング
4. 最終審議
5. 閉会
6. 結果発表・講評(公開)

1. 開会(会場：会議室3)

■5名の委員全員が出席しており、定足数を満たしていることを確認した。

(委員長挨拶)

委員長：最終審査に至った。審査は提案者が誰なのか分からない状態で行われる。専門的な見地から見ると、どの提案者の案も、手を加えずにそのまま造れるようなものではないと考えられ、その意味でプロポーザルの「案ではなく人を選ぶ」ということの意義が際立つと思う。このプロジェクトに対する基本的な考え方と遂行モードを見極めるということであり、非常に難しいことであるが、よろしくお願ひしたい。

2. 本日の進行について(会場：会議室3)

委員長：本日の審議の進め方について説明を求める。

事務局：これから交流ホールでプレゼンテーションとヒアリングを行う。傍聴人は約190名の申し込みがある。1者あたり、プレゼンテーションは15分間、ヒアリングが30分間である。5者全て終わったあと、エッグホールで最終審議を行う。その間、交流ホールでは来場者向けに模型を展示する。また、最終審議に入る前に、来場者アンケートの結果を報告する。最終審議で受注候補者と次点者を決めていただき、結果を委員長から市長へ報告後、結果発表及び講評を行う予定である。

委員長：私から提案がある。今回、どの提案も様々な側面で調整が必要になる。全提案者に対し、冒頭で、私から総論として「今後、発注者、アドバイザー、音響コンサルタントと協調して課題解決を進めていく意思があるか」、また、提案のなかで、「核にな

っていく非常に重要なところ、ここだけは譲れない要素があるならばどこか」の2点について質問をしたい。その上で、皆さんから質問をしていただきたい。

次に、最終審議の進め方について説明を求める。

事務局：最終審議は60分程度を予定しており、進め方については審査委員会の協議によって決めていただきたい。受注候補者と次点者が特定された後、事務局から提案者名と配置予定技術者名を記載した資料を配布し、その提案者が参加制限に該当していないかの確認をお願いする。問題がなければその2者で決定となる。その後、受注候補者と次点者の評価を取りまとめしていただきたい。

委員長：最終審議の方法について、後でまた確認はするが、私が考えている方向性をあらかじめお伝えしておきたい。二次審査において、各案について各委員から意見をいただいたのが大変良かったと思うので、今日も最初に、一人ずつ各案についてコメントをいただきたい。次に、2点と1点といった差を付けた投票を行い、そのうえでさらに議論していくということとしたい。

委員：オブザーバーの専門的な立場からの意見はどのように伺うのか。

委員長：審査委員が先にコメントをし、それを踏まえて、課題についてオブザーバーがコメントをし、その後投票という形としたい。

### 3. プレゼンテーション及びヒアリング（会場：交流ホール）（公開）

<審査委員、オブザーバーは交流ホールへ移動。市長も交流ホールに入室>

#### （1）市長挨拶

市長：長きにわたって楽都仙台の市民の皆様方から待ち望まれていた2000席規模の音楽ホールと、震災の経験と教訓を未来の世代につないでいく中心部震災メモリアル拠点、この2つの拠点は、本市にとってこれからのまちづくりに欠かせない重要な施設である。建設を予定している青葉山エリアは、伊達政宗公が仙台のまちを開いた始まりの地でもあり、豊かな自然、文化、歴史、学術資源のある、仙台市民のアイデンティティとも言える場所である。そこに建設されるこの施設は、まちの新たな魅力を生み出し、価値を創造する施設として多くの皆様方から期待と関心を寄せられている。プロポーザルに参加いただいた全ての皆様方に深く感謝を申し上げる。審査委員の先生方には、引き続き、公正公平、丁寧な審査をお願いしたい。杜の都の新たなシンボルとなって、末永く市民の皆様方に愛され、人とまちを育む施設を創っていく、その大きな一歩を踏み出す会になることを期待している。

#### （2）審査委員長挨拶

委員長：プロポーザルは、設計案そのものを選ぶのではなく、これから設計していく人を選ぶ方式である。技術提案書を出していただいているが、これは、背景にあるその人の考え方や、この仕事に十分対応できる力量があり、市民の方々に愛される建築になるような設計を遂行できるかどうか、ということを見るものである。

このプロジェクトは非常に難しいプロジェクトである。全体として大きな建築にならざるを得ないが、景観を壊すようになってはならない。また、震災メモリアル拠点と音楽ホールが融合する、おそらく世界の中でも先例のない建築であるが、これ

らを融合させて1つの建築にするには非常に創造力が必要になる。また、音楽や演劇を観るというのは、家を出て施設に向かい、休憩時間には休憩をして、終演して家に帰るという一続きの体験であるから、ホールの中が素晴らしければ良い訳ではなく、駅からの関係、あるいは街との関係といったことも考えなければならない。それから、提案された案をそのまま造る訳ではなく、様々なコミュニケーションを通してフレキシブルに案を造り変えていくことが必要となることから、そのような能力も求められる。

今回69の技術提案書が出され、それをまず30者に絞り、そこから11者に絞り、そして本日の最終審査に臨む5者を選ぶという3段階の審査を経てきた。今現在でも審査委員はこの5者が誰であるのかを知らない。それぐらい公正に、徹底した匿名の下に進めてきた。ここに残らなかった提案にも、優れた案が多数あったことは申し上げておきたい。これからプレゼンテーション及びヒアリングが始まるが、このような経緯を知っていただいた上でご覧いただければと思う。

■事務局より来場者へ、審査委員・オブザーバーの紹介。

<ここで市長退出>

■事務局より来場者へ、公開プレゼンテーション及びヒアリングの概要、注意事項の説明。

### (3) プレゼンテーション及びヒアリング

■以下の順番で、プレゼンテーション及びヒアリングを実施した(プレゼンテーション15分以内、ヒアリング30分程度)。

- ①整理番号11番
- ②整理番号24番
- ③整理番号29番
- ④整理番号30番
- ⑤整理番号47番

## 4. 最終審議(会場:エッグホール)

(アンケート集計報告)

■公開プレゼンテーション及びヒアリング会場で実施した来場者アンケート調査の集計結果を事務局から報告した。

・アンケート回答数は18件であり、うち14件が仙台市内在住の方、4件がそれ以外に在住の方であった。

・「施設整備の方向性で重視すべきと思うこと」という設問(複数回答可)に対し多かった回答は以下のとおり。

「誰でも気軽に立ち寄ることができる施設」(15件)

「多様な催しが展開され、来館者が文化芸術や災害文化に関する様々な活動に出会い、興味関心の領域を広げられる施設」(14件)

「周辺環境と調和した施設」(12件)

「市民が主体的に活動できる「みんな」で育む施設」(10件)

・自由記述欄に記載された意見等を紹介した。

(最終審議)

事務局：受注候補者及び次点者を特定する最終審査を行う。進行を委員長にお願いする。

委員長：アンケートは率直な意見が聞けて、実施して良かったと思う。

受注候補者と次点者を特定する審議に入る。

最初に、各委員から5案それぞれについて、コメントをいただきたい。

◆11番

◎二次審査段階では不安があったが、プレゼンが上手く、今回の説明を受けて、チャレンジングな、これまでにない建築の提案という印象を受けた。そのような意味で評価する部分がある一方、自然環境との調和などの面では、ヒアリングにおいて考え方の説明はあったものの、個人的には少し受け入れ難いと感じている。

◎チャレンジングな建物でわくわくはするが、オペレーションの不安が拭えない。運営費がどんどん膨らむのではないかと懸念する。海外などから来る人にはびっくりする面白い建物になるだろうが、仙台人にとってはどうか、景観との調和も懸念がある。

◎ホールとメモリアルをどう融合できるかという、本施設の大きなテーマに対して非常に明確な回答を提示したことは高く評価できる。一方、日常的な利用のイメージが分かりにくかった。ヒアリングでは非常に柔軟な姿勢を示されており、様々な課題の解決はできると思う。ただ、この案を選ぶにはかなり覚悟はいると思う。

◎応募されたなかで一番ダイナミックな提案であり、評価をしている。ただ、一番印象的なパースが、機会の少ない建物全体でのメモリアルイベントのシーンであって、日常の通常モードをどうするのか。そこを柔軟に対応すると述べていたが、そうしたときに、今の提案の魅力がどのくらい担保されるのか心配がある。

◎様々な個別の要求や災害文化と音楽文化の統合といった要求に、各部屋、各機能ではなく、建築のタイポロジーという形で応えた案である。建築の原型をゼロから創造しようとしたことが他の提案と決定的に違っていて、非常に高く評価できる。具体の建築としてまとめる力もあると思う。ただ、閉じている状態がほぼ常時であるというのであれば、それもプレゼンテーションすべきであったのではないかと思う。

◆24番

◎ヒアリングでの質問に対して、こちらとしては提案で既に述べられていたこと以上の回答を求めているのだが、同じことを繰り返して説明していたようなところがあり、対話力に若干不安を感じた。プレゼンテーションを聞いても施設の窮屈さの懸念が払拭できなかった。実際に劇場に足を運んだ時の、例えばトイレはすごく並ぶんだよね、というような現場感覚が感じられる提案であったなら良かったと思う。

◎コンパクトにまとめられたシンプルなプランであることが評価され、この段階に残ったのだが、図式的には解けているように見えても、劇場としてのリアリティから考えるとこれは成立しないだろうと思えることが多く、お任せするのは難しいかなという印象を持った。

- ◎丸を使った形のデザインは綺麗だと思う。回遊性が意識されているものの、実際の使い方を考えるとそこまでは動けないのではないかと思えること、また、その影響で大事な活動機能が端に追いやられていることが気になった。それを質問したが、明快な回答がなかったという印象である。
- ◎経験の少なさなのか、プレゼンテーションにおいて、自分がこのプロジェクトを担うという実感を持っていてる感じがあまりしなかった。
- ◎コンパクトな提案であるとの印象は持っていたが、動線が交錯する部分があり計画上問題であると思った。設計にあたっては、災害文化についての造詣をもっと深めてもらう必要もあると思う。

#### ◆29番

- ◎ヒアリングでの質問に対しての説明が長すぎて要領を得ていないところがあり、選定された場合にコミュニケーション面で大丈夫だろうかという懸念はあるが、案としてはすばらしいものになっていると思う。グラウンドホールという提案は、ホール建築と震災メモリアルとの複合施設としてどのような空間を持つべきかという本プロポーザルのテーマに対する一つの答えなのだと思う。その意味で今後揉んでいけば、面白い結末に到達できるという期待は持てる。
- ◎グラウンドホールと言っている部分は建物全体計画の半分ぐらいの話だが、プレゼンテーションではその部分に限定して話をしていた印象。その部分の提案は面白いのだが、そこで選んでいいのか迷ってしまう。
- ◎ホールがあり、その周りにホワイエがあり、災害文化をホワイエで表現するというパターンの提案が多い中、この提案者は建築の原型に近いような形で災害文化空間とホールを合体させていることが評価できる。ヒアリングでは、災害文化関連施設は地上に出してエントランスホールのような場所に置いては駄目だと述べており、この提案者独自の震災文化への理解があるように思う。本人は明確に語っていないが、建築をととも低くする都市空間をつくり、上部は街を感じる・明るい歴史を感じる空間、下部は自分に向き合う空間といったような対比がなされていて、この明暗という要素が建築の中と外観両方を決定づけていると思う。そうになると、高さを低く収めることが絶対的な条件ということになると思われるが、果たしてそれで施設に必要な機能を収められるのだろうかという懸念がある。
- ◎高さも抑えられており、悪くない案だと感じている。地下鉄との地下での接続は絶対条件ではないということだったが、そうであれば必ずしも地面を掘り下げてグラウンドホールを地下に入れなくてもいいのではないかと思った。また、設計者としてやりとりする段のことを考えると、話がもっと簡潔になっていると望ましかった。
- ◎とても感性型の方だなという印象。自分の中で明確なコンセプトを持っているので、発注者側が上手く引き出すことさえできれば、新たな発見がある建築物ができるのではないかという期待を感じた。駅を超えて他施設との連携を考えている点、また、日立システムズホール仙台にあるパフォーマンス広場のよう誰も気軽に訪れることができる空間が実現できるのではと思えた点は評価したい。

◆30番

- ◎全体としてよくできていると思う。プレゼンテーションの中で「重なり代（しろ）」という話が出てきたが、芸術文化と災害文化の重なり代になっているのか、また、プロフェッショナルとアマチュアの共存の話も具体的にどういう棲み分けをしていくのか、よく分からない部分があった。ただ、目指そうとしているところは分かったので、今後の調整の中での可能性は感じた。
- ◎コンセプトを形にしていく力、それも、現実的なことも考えながら形にしていく力があると感じた。一方、分業化された体制であると見受けられ、発注者側の思いを誰が受け止めてくれるのかということが分かりにくかった。「しま」と「かわ」という図式は、建築の原型、タイポロジーの視点からすると、ショッピングモールの、要するに商業空間のように感じられ、今回のプロジェクトとしては疑問がある。ただ、建築として良くできていることは評価すべきである。
- ◎この提案は結構いいものだと思っている。「しま」と「かわ」というコンセプトは分かりやすく、柔軟な対応も明言されていたので、プロジェクトをやり切ることはできると感じた。また、工程管理、コスト、市場調査などにもしっかりと言及しており、事業を進行させる能力はあると思った。
- ◎機能や動線はしっかり考えられている。「しま」と「かわ」の部分は質問に対してもよく回答されていてイメージが掴めたが、見て欲しいところで人がしっかり滞留してくれるのか、また、「壁をほどく」という提起もあったが、クワイエットスペースなどの静寂性を保てるかといったことなどが気になるところである。
- ◎「しま」と「かわ」の「かわ」だが、美術館に行くという「かわ」の方向が明示されている。つまり、周辺との関係をつなぐものと意図されている。だからこそ、パサージュに近い、駅前のモールに近い感じもするのだが、この「かわ」の部分が施設の中心的な空間となるので、ここに文化施設や震災メモリアルとしての質を持たせられるのかが課題になるだろうと思う。部屋自体は四角形で構成しているのだが実際の体験としては曲線の方が強く印象に残りそうであるなど、面白いことができているので、出発点の案としては良いものだと思う。

◆47番

- ◎提出された提案書の完成度としては驚きがある。ただ、ホール施設の従来のタイポロジーを今回のプロジェクトに当てはめてきたという感じは否めず、ボリュームの面からも、あの場にふさわしいのかという懸念はある。また、細部が快適になっているか、多様な交流が本当に生まれるのかといったところに疑問を持った。もっと自然光や風を入れるような形にした方が良いのではないか。プレゼンテーションでは東西の側は柔軟に変えられると述べられていたので今後の調整は可能かもしれないが、全体の計画の強さがあるぶん、個別の人間の場所をつくることがあまり意識されていないという印象である。
- ◎プレゼンテーションを聞く前から箱として大きいという印象を受けており、模型を見ても大きかったが、ある程度形は可変できるとのことであった。今後の対話の仕方についての確な回答をしていた点、近隣の施設との連続性という視点をしっかりと持っていたという点をかなり評価している。

- ◎やはり大きさの印象が強い。また、人中心の目線で考えられているのかというところで、例えばクワイエットスペースは快適そうではあるのだが心がさわさわした時の逃げ場所にはならないのではないかとことや、スロープの上まで登っていく心理負担があるのではないかとということが気になった。防災ワークショップを13年やっているということや、地元の情報もよく調べられているということは高く評価できるが、スロープ状にタッチポイントが分散されているという空間の仕組みが、交流を生んだり災害文化を知らない人に伝えたりすることに本当につながるのかは確信が持てなかった。ただ、様々な課題を対話の中で解決できる能力がありそうだという安心感があった。
- ◎非常に安心して頼める感じがした。震災メモリアルについては対話からスタートすることだったが、発話者がしっかりと主張を持たないと対話は進んでいけないので、長期にわたる取組みを基にした、震災メモリアルがどうあるべきかという主体的な提案があれば良かった。ハンドリングをきっちりしてくれるという安心感はあるが、質は良いが非常に標準的なものになってしまう可能性もあると感じた。
- ◎コアとなるホールの中に、リハーサル室の列を置いて、その両サイドはフレキシブルにできるといった骨格を明確にしている点は、従来のホール建築の型を踏襲しているとはいえ、新しい事にもチャレンジしていると思う。ただ、ホールに力を入れている感があり、震災メモリアル機能についてもっとはっきり打ち出したほうがプレゼンとしては良かったのではないかと思う。

(オブザーバーコメント)

委員長：ここで、オブザーバーから各案についてのコメントをいただきたい。

◆オブザーバーからのコメント

- ◎施設全体に関する考え方として、「ここにしかない、仙台にしかない場所をつくること」「性別、国籍、障害の有無などを超えて全ての人を訪れたい場所をつくること」「施設を訪れ、活動している人たちが交流できる場所にする」「1年を通じていつでも使える場所にする」という4点を重視することを、基本構想、基本計画策定時に議論してきたところである。
- ◎震災メモリアル拠点はホールと異なり形が決まっているものではないが、「どこかに適当に置けば成立する」ということではなく、災害文化を考えていくための場はこういうものであるということは明確である必要がある。いずれの提案者も柔軟に対応すると言っていたので、具体的なところは詰めていけると思う。
- ◎どの案についても直してもらわなければならない部分はある。11番はいくつか懸念点はあるが、ホールの開閉について柔軟に考えることができるとの話があったので、解決は可能と思われる。24番は、劇場に対する理解、セキュリティーや動線計画についての理解が不足しているように思われる。29番は、地下部分にかなりの機能が入っているところにいくつかの難しい点があり、今後どのように調整できるかが問われる。30番は、分業化された体制に不安要素があるが、案としては非常に魅力的で、計画的にもある程度まとまっている。47番は、他の案に比べると大変によく考えられた提案で、ある程度このままでも進められるなど受け止めたが、クワイエットスペースについてどういう風に

理解をしているかわからなかった。

◎音響性能に関して重要なことの1つは遮音性であり、たくさんの部屋で同時に音を出すことができるようになっている必要がある。この点では11番が一番大変そうではあるが、どの提案でも今後の調整により何とかなると思われる。

◎音響性能に関してもう一つは、大ホールのコンサート形式についてどの程度の意識があるかということにも着目すべきである。具体的には天井の高さ、ステージと客席の断面・平面両方での連続性といったことであるが、従来型の多目的ホールの舞台の横や後ろに客席を足しただけのような、客席全体のサラウンドという意味があまり考えられていない提案もあった。11番と47番はその部分を考えていることが技術提案書上で見て取れるが、残りの提案はステージと客席に不連続性が見られ、設計開始後に相当の議論をしなければならぬと思われる。

#### (参考投票の実施)

委員長：ここで、議論を進めるための参考投票を行いたい。朝に話したとおり、2点を1者、1点を1者という形で、重みをつけて2者に投票する方法としたい。

#### ■第1回参考投票を行い、結果は以下のとおりとなった。

整理番号	合計点	内訳
11	6点	2点：3名
24	0点	
29	3点	1点：3名
30	3点	2点：1名、1点：1名
47	3点	2点：1名、1点：1名

委員長：参考投票の結果を整理すると、まず11番と29番が過半数の委員からの投票を得ているということになる。30番と47番は投票したのは2人であるものの、1人の委員は強く推しているということであり、これも意味があることである。

点数では、11番が他の案の倍である6点を取っており、普通にいけば11番ということになる。ただ、高く評価できる要素がある一方で、実現のためのハードルがあると見込まれる案であり、もう少し議論をしたほうが良いと思う。各委員の考えを聞きたい。

#### ◆委員からのコメント

◎今回のプロポーザルというものを考えた時に、やはり、音楽ホールと震災メモリアル拠点という2つの重要なプログラムをどのように一体のものとするのかという問いにしっかりと応えている提案を推すべきだと思うと、11番か29番になる。

◎11番は、実現の可能性があるのであれば、新しい形を選ぶことはこの審査委員会としては大事なことであると思い投票した。

◎11番は、票は投じなかったものの発想や設計の実力は凄いと感じた。市民の理解をどのように得ていけるのかという課題があると考え、そこを上手く説明していけるので



あれば選ぶことはあり得ると思う。

- ◎11番は、地元の人々がどう受け止めるのかイメージしにくいところがあり、どのように情報発信していくのかが重要だと思う。
- ◎29番は、アイディアは面白いが、3万㎡規模の大きな施設を造りきれるのかというところに不安がある。
- ◎30番は、バランスよくまとめられているが、売りの部分が弱く、「かわ」「しま」という言葉と形がそこまでリンクしていないように思えた。
- ◎30番は、分業化された体制であるところが懸案である。
- ◎47番は、保守的ではあるが、国際的なレベルのホールを造るにあたり、十分なクオリティのものにしていけそうだという信用が持てるので投票した。
- ◎2点を投じた案と1点を投じた案の間に、そこまで大きな評価の開きがあった訳ではない。

委員長：2点を投じた案と1点を投じた案の間にそこまで大きな差はないという意見もあった一方、11番には投票しなかったが評価はしているという意見もあった。ここまでの議論を踏まえると、受注候補者としては11番が妥当ではないかと考える。

ただし、仙台市民の方々がこの提案を受け入れてくれるかどうかという問題は残るので、選んだ審査委員会としては、今後もサポートしていかなければならないと思う。今後プロジェクトを進めていく中での重要な局面において、我々審査委員が間に入ってアドバイスをするような機会があれば、市民の方々に受け入れていただける方向により向くのではないかと。公開プレゼンテーションの冒頭でも述べたことであるが、プロポーザルとは案でなく人を選ぶものであり、ここで示された形のとおりのものできる訳ではないということが伝わるよう、サポートを行っていきたい。以上のことも踏まえ、受注候補者は11番が良いのではないかとと思うが、いかがか。

(委員了承)

委員長：それでは、受注候補者は11番と決定する。

次に次点者の決定を行う。29番、30番、47番の3者が点数でいうと3点と同じ点数である。この3者を対象に、参考投票を行う。良いと思うものに2点を、次に良いと思うものに1点をいれていただきたい。

■次点者を決めるための第2回参考投票を行い、結果は以下のとおりとなった。

整理番号	合計点	内訳
29	7点	2点：3名、1点：1名
30	4点	2点：1名、1点：2名
47	4点	2点：1名、1点：2名

委員長：次点者は29番でよろしいか。

(委員了承)

委員長：以上により、整理番号11番を受注候補者、整理番号29番を次点者として特定す

る。

(事業者名の開示)

- 事務局より、受注候補者と次点者の事業者名、配置予定技術者名を開示した。
- プロポーザル実施要領に定める参加制限等に抵触していないかを審査委員・オブザーバーに照会し、該当がないことを確認した。
- 事務局より最終審査対象者全員の事業者名を開示した。

委員長：当初の想定では、ここで受注候補者と次点者の評価を取りまとめることとしていたが、これまでの議論で多くの意見を聞いているので、割愛する。  
以上をもって、審査を終了する。

## 5.閉会

- 閉会后、審査委員長より市長へ審査結果を報告した。

## 6.結果発表・講評（会場：交流ホール）（公開）

<審査委員、オブザーバー、市長は交流ホールに入室>

(審査結果の発表)

- 委員長より、受注候補者として整理番号 11 番を、次点者として整理番号 29 番を特定した旨を発表した。

(事業者名の公開)

- 事務局より、以下のとおり最終審査対象者の事業者名を公開した。

	整理番号	事業者名
受注候補者	11	株式会社 藤本壮介建築設計事務所
次点者	29	山田紗子建築設計事務所+BPD+佐藤慎也研究室設計共同体 代表構成員：合同会社 山田紗子建築設計事務所 構成員：株式会社 パウ・フィジック デザインラボ
その他最終 審査対象者	24	北澤伸浩建築設計事務所
	30	昭和+デ YetB 設計共同企業体 代表構成員：株式会社 昭和設計 仙台事務所 構成員：株式会社 +デ一級建築士事務所
	47	株式会社 日建設計

(講評)

委員長：このプロポーザルは、冒頭で申し上げたとおり、案そのものを選ぶのではなくて、人を選ぶものである。もちろん技術提案書による提案もいただいた上で選ぶので、

案の内容も含めて判断をするが、案を選ぶ訳ではない。それではどうやって人を選ぶことができるのかということが、我々審査委員にとっての非常に難しい問題であった。このプロジェクトはいろいろな意味で特殊なところがある。音楽ホールと震災メモリアル拠点が融合するという先例のないタイプの建築であること、ここにしかないものを造って欲しいという市民の思いがあること、季節を問わず日常的に行ってみたい場所になること、などである。その意味では、従来からあるホール建築の変形、あるいはそれにプラスアルファをするものではなく、ある意味でホールというもののあり方を全面的に更新する、あるいは震災メモリアルというもののあり方を全面的に創造していく、そのようなことまで視野に入れた提案を求めている訳である。

二次審査で、非常に悩んだ問題は、応募された69者のうちそのような答えを出してくれた提案者はどれだったのかという点である。審査委員の中でも立場によって評価が変わってくるものであるが、何とか5案、なるべく異なるタイプの答え方で、今申し上げたようなテーマについて答えられているものを選んだ。

その5者について、それまでは技術提案書等だけの理解だったが、本日直接話を聞き、かつ質疑ができ、理解を深めることができた。最終審査対象者である5者は、誰が受注候補者になってもおかしくない立派なレベルにあったし、最終審査に選ばれなかった提案者の中にも、ここに残っておかしくない方が大勢いたことを申し上げておきたい。

11番を受注候補者として決定した理由について申し上げる。

この案をこのままで造るということであれば、これを選ぶことはなかったと言える。そうではなく、提案の根本にある「観点」に注目をした。

震災を経験した方々は、一つの震災を共通に経験したとは言え、皆さんそれぞれ違うように受け止め、違うように消化してこられたと言える。それぞれの人にとってそれぞれの震災があるという「観点」を根本に持っているからこそ、色々な場所がこの空間の中にあり、ただそれだけではなく特定のある時だけは皆で一つの音楽を聴ける場となる、という提案となったのだと我々は理解した。

技術提案書の中にあるパースは、全部開放された場合であるが、今日お話を聞きくと、ここまでの開放をすることは例外的なケースであり、あるいは、かなり固定的に壁があったりする場合も出てくるし、床も必ずしも斜めという訳ではないと言われた。これから市民の方々のいろいろな意見を聞きながら、フレキシブルにやっていきたいと、かつ、仙台に事務所を置いて、そこに本人もかなりの回数来ます、というような姿勢であった。そういうことであればこの人に任せて、この仕事に関わってもらうのがいいのではないかと、という判断をして、11番を特定した。

今日実施した来場者アンケートでは色々なコメントをいただいたが、その中で印象的なのは、この施設が普通の市民が日常的に行ける場所なのか、という視点が強かったということである。また、回答者の約4分の3は仙台市民であったが、単なるホールではなく、単なるメモリアルでもなく、今までなかった新しい公共的な場所をつくって欲しい、というご希望が多くあった。この意味でも受注候補者として11番がふさわしいという判断をした訳である。

次に、次点者となった29番に対する評価について申し上げます。

この提案者も、単なるこれまでのホールの延長ではなく、あるいはメモリアル  
の延長ではなく、今までなかったタイプの建築のあり方を提案している。この  
点で非常に高い評価を得た。特に、若干掘り込んだ地面と言ったらいいか、  
穴という表現をされていたが、この空間がかなり巨大で、半戸外であつたり、  
室内であつたりするようだが、そこが実は震災のメモリアルのための空間  
であるとして、そこに一種の展示であつたり、あるいはホワイエ的な機能  
が発生していくというストーリーであつた。その部分において非常に面白い、  
非常に可能性の高い案だという評価もあると同時に、もう少しその部分  
について、審査委員になるほどそうだと思う説得力のある説明をして欲  
しかったという意見もあり、最終的には次点となった次第である。

なかなか難しい審査であつたが、議論を尽くして、この5者の良かった  
点、疑問な点について、審査委員全員で話し合い、またオブザーバーの方  
々には専門的立場からこれらの案を進めていって大丈夫だろうか、という  
ことを確認しながら、選んだ次第である。形としての案そのものを選んだ  
ということではなく、提案が持っている考え方、そういうことを考えて  
進めていこうという計画、あるいは人を選んだつもりである。受注候補  
者においては、是非そのことを受け止めて、頑張っていたきたいと思  
う。

#### (市長挨拶)

市長：本市が造りたい施設について、本当に多くの皆様からご提案があつた。  
プロポーザルに参加いただいた設計者の方々にまずは厚く御礼を申し上げる。

その上で、お忙しい中、いくつもの提案を長い時間をかけて丁寧に審査して  
くださった青木委員長をはじめ審査委員の皆様方に心から御礼を申し上げる。

本市の複合施設整備事業が今日大変重要な一歩を踏み出したということを実感  
しているところである。

今委員長からもお話があつたが、受注候補者となった皆様、専門のアドバイ  
ザーの皆様、音響コンサルタントの皆様にはさらに対話を重ねていただき、私  
ども宮城、仙台市にしかない施設の整備を着実に進められるようにしてまい  
りたい。

今日はありがとうございました。

以上